タタラ場の痕跡を求めて②

戸谷　克己　著

池田家に伝来して来た絵像は、上部の中央に鍛治に携わった人達に影響を与えた密教や神道、陰陽道をミックスして造り出されたものと思われる三面八臂の神将像が描かれ、その人臂の手には一対の弓矢と三対の刀が握られている。その左右には、秋葉神社の火伏せの神である「三尺坊大権現」を表した斧を持った鳥天狗と、愛宕神社の火伏せの神である「愛宕権現」を表した弓と鎌を持った公家の姿をした人物が描かれている。その下には、左右の者は肩脱ぎで、中央の者は祥姿の格好で、それぞれ鎌槍・刀・弓矢を持った三人の人物が描かれている。そして、その絵像の三分の一程を占める最下段には、まさに鍛治屋絵像としての烏帽子を被った金山彦と御垂髪にした金山姫を思わせる公家風の着物を纏った二人の人物の下に、鬼のようにも見えるが、角が生えていないので普通の人のように見える、中央の赤く塗られた人物が片手に玄翁を持ち片手で金鋏で挟んだ鍛造中の板状の鉄片を支え、その脇にいる人物が金床の上にあるそれに大槌を振り下ろそうとしており、赤く塗られた人物の左奥では青く塗られた人物が箱形の鞴の柄を押して風を送って火を熾している姿が、描かれている。

この上名栗の―池田家の最下段に描かれていたものとほぼ近似していたものが中沢の平沼家に伝来していた絵像にも描かれていて（残念ながら、現在は行方知れずになっているが）、それに似せて新たに三体の鍛治人形と一体の金山姫の人形として木彫りされて現在にまで伝わって来たのであろう。

江戸時代後期に編纂された「新編武蔵風土記」の「秩父郡南村中沢組」の項に、「金山権現社、神体岩上に踞らせたる木像、長七寸許、里正半平が宅地にあり」と記されているが、ここに出て来る「木像」は、平沼家伝来の鍛治人形のことを指しているのであろう。

この地には、昔から「その昔、都から落ちてきた平の平沢（ちゆうたく）という公家が鍛治屋を始めた」という伝承があり、その公家が平沼家の祖に当たるのであろうが、元々は平沼家は現在地から西に五百メートル程奥にある「鍛治窪」と呼ばれる場所にあり、その近くには巨岩が隆々と聳えている場所があり、かつて、その場所に「金山権現社」があって、そこに「木像」鍛治人形とが祀られていたのであろう。

このような事物や事象から、まさに、この中沢の地にタタラ場が確実に存在していたということが分かるであろう。そのことを更に物語るものとして、現平沼家のある場所から道路沿いに五百メートル程下った、子の権現に向かう方向の道と二股になっている場所の高台に「権五郎神社」というものがある。

この神社は「御霊神社」ともいい、スサノオノミコトを祀る神社でもあるが、神社名の「権五郎」とは『保元物語』に「後三年の役」（一〇八三～八七年）の時に、勇猛を持って知られていた鎌倉権五郎景政という人物が、合戦の最中に左目を射られて、片目を失ったものの、その後も存命で活躍したという記事が出て来るが、その鎌倉権五郎のことである。言うまでもなく、タタラ場で働く村下（親方）等は、精錬の最中にホト穴から火の様子を見なければならず、その光に当たって片目を失うことが一般であったために、片目を失うという共通点から、鎌倉権五郎はタタラ場で働く人達の祭神に成ったのである。（それに、権五郎の根拠地であった鎌倉の地自体が産鉄地帯であり、カマは古代朝鮮語で鉄のことを、クラはその鉄が眠っている谷のような場所のことを示す言葉である。）

このようにこの地に「権五郎神社」があるということは、かつて、この周辺にタタラ場があったということを、雄弁に物語っているのである。

（戸谷）